

カリタスの家だより 第25回

■ 「ミュンスターのライオン」として恐れられた司教

「東京カリタスの家」誕生のきっかけとなったケルン教区フリングス枢機卿のご功績(こうせき)については折に触れられているので、今回は同時期にナチ政府に対し一貫して闘ったミュンヘン教区フォン・ガレン司教について紹介する。東京教区へのドイツ教会の多大な援助金の背景に、「地の塩」たる任を世に示したカトリック教会の指導者のもと一丸となった信徒の戦いの歴史があったことを心に留め、カリタスの家がめざすべき活動の原点を再確認するためでもある。

クレメンス・フォン・ガレン司教は2004年ヨハネ・パウロ二世によって福者に任命(現教皇により翌年列福式)された。1933年ヒトラー首相就任後の初の司教叙階者で、「賞賛も気にせず非難も恐れず」の叙階の銘めいのように、突き進んでいたナチス体制に真まっ向こうから反対した。司教は、ナチ当局から「ミュンスターのライオン」と呼ばれるほど恐れられた人物であり、今、捕縛すると信者が暴動を起こすので戦勝後に捕縛(殺害)することが了承されたといわれる。その決定打は、1941年8月3日、日曜日の司教座聖堂での説教である。

7月13日、20日、8月3日と連続説教を行っているが、これらははじめから計画されたものでなく、ゲシュタポによる突然の修道院没収事件や非生産的な障がい者、病人などの安楽死が教区内の身近な出来事として生じたことによる。

特に8月3日の説教は、ナチの「安楽死」実施を弾だん効がいた司教の歴史的な説教として世界的に有名になる。7月末に教区の障害者施設のチャプレンから司教は電話を受けた。800人の人々が「非生産的」とあるという理由で、移送(殺人)が決定されたという内容だった。司教はすでに同じような相談を福音教会の障害者施設ベートルからも相談されていた。41年にはいると移送専用のバスが特定の施設や病院へ送られ、多くはガス毒や薬などによって迅速に処理されており、家族は送られてきた死の通知書と遺灰の受け渡しではじめて知らされるという状況であった。

経済的に非生産的であるという理由で、病弱者、障害者、不治の病の人などを殺す権利を一度でも認めるならば、私たちの誰も安心して生活できない。すべての非生産的な人々が暴力的に排除されるのであれば、戦争で勇敢に戦って負傷したり病気になって帰還してきた兵士たちの身にも起こりうる指摘した。司教の説教は集まった群衆をはるかに超え、1週間の中に国中に広まった。1000枚のコピーは差し迫った死の危険にさらされている負傷兵たちとその前線で戦っている兵士たちにも広がり、また反ナチの組織によって数万枚のコピーが作られ、国をこえて配布された。後に教皇となったヨハネ・パウロ二世もポーランドでこれを目にしたといわれる。ヒトラーは彼を刑務所に入れるほどに憎み恐れたが、信者の反動を恐れてドイツが勝利した後に司教を殺害する計画をしていたという。説教の効果で、8月後半には安楽死作戦は一時中止となり(秘密に続行)、施設か

らの大量輸送などはなくなった。

この最中の8月13日、マキシミアノ・コルベ神父はアウシュビッツ収容所で他の囚人の身代わりとなり餓死刑で亡くなった。

戦後まもなくピオ十二世はガレン司教を枢機卿に任命。46年2月、祝聖式が行われた。式後、イタリアのドイツ兵士の墓参をして帰国。かつてスピーチした司教座聖堂はミュンスター市全体が爆撃を受け破壊の状態だったために、壊れた教会前で枢機卿としての初の、そして最期のスピーチを行った。枢機卿はその数日後に虫垂炎で亡くなられた。まさに暗黒時代の地の塩としてのご生涯であったといえよう。

ドイツ教会からの支援は憤りと正義と愛の痛みを体験した人々から献金されたものであり、東京カリタスの家は兄弟として、自分たちの手で支えあっていくという旗を掲げてきた。自由な活動であるために、縛りやしがらみのある資金に頼らない選択である。そのために資金づくりの賛助会が組織された。年間600余件のケースに120名余のボランティアが活動する。いま、私たちが地の塩となるためには、「寄り添いつつ」共に生きていくことではないかとあらためて考える。「寄り添う」ことはどういうことなのかを常に肝に銘じながら。

(Sr 米田 綾子)